プログラム・ノート

解説＝飯尾洋一

民族色豊かな親しみやすいメロディを堪能

本日は「コバケン」の愛称で親しまれる日本を代表する名指揮者、小林研一郎による名曲集をお届けします。「炎のマエストロ」の異名をとるだけに、大ベテランとなった今もその音楽にかける情熱は衰えることがありません。

本日演奏されるグリンカ、ドヴォルザーク、スメタナといった中東欧の作曲家たちの名曲は、いずれの作品も親しみやすく、民族色豊かなメロディにあふれています。私たち日本人にとって、初めて聴いたときからどこか親近感を覚える作品が多いのではないでしょうか。それでいて、くりかえし聴いても飽きることのない味わい深さがあるのが名曲の名曲たるゆえんでしょう。

メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲では、若手の注目株、荒井里桜がソリストを務めます。第15回東京音楽コンクール弦楽部門第1位を獲得し、数多くのオーケストラとも共演を重ねる次代を担う新星です。マエストロとの年齢差はなんと59歳。巨匠と新星の共演にご注目ください。

マエストロ小林が情感豊かな美しいメロディの数々をお届けします　©上野隆文

スピード感にあふれた華々しい序曲

ミハイル・グリンカ（1804-1857）は19世紀ロシア国民楽派の父と呼ばれる作曲家。現在、グリンカの作品でもっともよく演奏されるのが、**歌劇『ルスランとリュドミラ』序曲**でしょう。

オペラの原作となったのはアレクサンドル・プーシキンによる同名の長編詩。当初、グリンカはプーシキン自身に台本を書いてほしいと望んでいましたが、プーシキンが決闘により亡くなってしまったため、代わりに作曲者を含む5人の共作で台本が作られました。物語の舞台はキエフ公国。キエフ大公の娘リュドミラが悪魔によりさらわれますが、求婚者である騎士ルスランが冒険の末にリュドミラの救出に成功し、ふたりは結ばれます。

序曲の冒頭は勢いよく開始されます。オペラ本編のフィナーレで登場するお祝いの音楽が用いられ、明るく楽しげなムードが広がります。続いて現れるのは第2幕のルスランのアリアに由来する、のびやかなメロディ。はつらつとしてスピード感あふれる楽想がくりひろげられ、輝かしい終結部に向かって突き進みます。

ドイツのヴァイオリン協奏曲を代表する傑作

ヨーゼフ・ヨアヒム（1831-1907）。12歳でライプツィヒ音楽院に入学後、メンデルスゾーンに師事している

作曲家、ピアニスト、指揮者として19世紀ドイツの音楽界を牽引したのが**フェリックス・メンデルスゾーン**（1809-1847）です。かつて、歴史的大ヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムは、ドイツの四大ヴァイオリン協奏曲としてベートーヴェン、ブラームス、ブルッフ、メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲を挙げたうえで、メンデルスゾーンの作品を「もっとも内面的な心の宝石」と賞賛しました。

作曲は1844年。ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の音楽監督であったメンデルスゾーンは、同楽団コンサートマスターのフェルディナント・ダーフィトのためにこの**ヴァイオリン協奏曲**を作曲しました。ヴァイオリンの演奏法についてダーフィトに助言を求めながら筆を進めたといいます。

第1楽章　アレグロ・モルト・アパッシオナート　弦楽器とティンパニによる短い伴奏に続いて、すぐに独奏ヴァイオリンが登場し、有名なメロディを奏でます。愁いを帯びながらも伸びやかなこのメロディは、メンデルスゾーンのトレードマークと呼んでもいいかもしれません。通常、楽章の終盤に置かれるカデンツァ（ソリストのみが奏でる技巧的な聴かせどころ）が、この曲では中盤に配置されています。

第2楽章　アンダンテ　前の楽章の終わりからファゴットが音を長く伸ばして、そのまま切れ目なく第2楽章に移ります。独奏ヴァイオリンが夢見るようなメロディを奏で、繊細で気品のある曲想が続きます。物悲しい中間部を経て、ふたたび夢見るようなメロディが帰ってきます。

第3楽章　アレグレット・ノン・トロッポ―アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ
短い序奏に続いて金管楽器による晴れやかなファンファーレが鳴らされます。跳ね回るような独奏ヴァイオリンの主題が続き、華麗な名技で彩られた輝かしい楽想が展開されます。

流麗なメロディが美しい優雅な舞曲

チェコの作曲家**アントニン・ドヴォルザーク**（1841-1904）の出世作となったのがスラヴ舞曲集。1878年、ドヴォルザークは連弾ピアノのための全8曲からなるスラヴ舞曲集第1集を書きあげます。これはブラームスのハンガリー舞曲集のヒットに気を良くした出版社が、同様の民族的な舞曲集を書いてほしいとドヴォルザークに依頼したもの。出版社の狙い通り、曲集は出版社に大きな利益をもたらし、ドヴォルザークの名も一躍知られることになりました。曲はオーケストラ用に編曲され、こちらも人気を呼びます。

1886年、ドヴォルザークはふたたび出版社の要望に応えて、スラヴ舞曲集第2集を書きあげます。第2集もやはり全8曲からなり、まずはピアノ連弾版が、続いてオーケストラ編曲版が出版されました。

本日演奏される**スラヴ舞曲第10番**は、第2集の第2曲。ウクライナの哀悼歌に由来する「ドゥムカ」の呼び名でご存じの方もいらっしゃることでしょう。メランコリックで流麗なメロディが奏でられます。

チェコの自然を描いた記念碑的大作から2曲

連作交響詩『わが祖国』はチェコ国民楽派の創始者、**ベドルジフ・スメタナ**（1824-1884）の代表作。祖国の伝説や歴史、自然を題材に全6曲の交響詩が集められた記念碑的大作です。本日は6曲のなかから、第3曲**「シャールカ」**と第2曲**「モルダウ」**の2曲が演奏されます。

「シャールカ」とはチェコの伝説に登場する女傑の名前。この伝説では男たちと女たちが敵対しています。曲の冒頭が勇ましい曲調なのは、シャールカの気性の激しさゆえ。しばらくすると、行進曲とともに英雄ツチラト率いる男たちの兵がやってきます。シャールカは仲間に自分の体を木に縛り付けさせて、通りかかったツチラトに助けてほしいと懇願します。優美なクラリネットがシャールカを、チェロがツチラトを表現します。ロマンティックな音楽が奏でられ、ツチラ

シャールカがツチラトを罠にはめた場面を描いた絵画（ヴェンツェスラフ・チェルニー作）

トはシャールカの縄をほどいてあげます。しかし、これは罠。宴の音楽で盛り上がった後、酔った男たちのいびきがファゴットで表されると、シャールカが吹く角笛のホルンを合図に女戦士たちが登場し、男たちを皆殺しにしてしまうのでした。

「モルダウ」とは、チェコの中西部を南北に流れる同国内最長の川の名前です（「モルダウ」はドイツ語で、チェコ語では「ヴルタヴァ」と呼びます）。ふたつの水源から流れ出した川が合流してひとつとなる様子が音楽で描写されます。冒頭、フルートが第一の源流を表現します。続いてクラリネットが表すのは第二の源流。ふたつの源流は重なり合い、小さな川の流れが次第に勢いを増して、川幅を広げます。哀愁を帯びた有名な民謡風主題は、雄大な川の流れを連想させます。川は森を抜けて、人々の暮らす村へ。ホルンを中心とする金管楽器が狩を連想させ、続いて歯切れのよいリズムで結婚式の村人たちの踊りが表されます。夜の訪れとともに曲調は幻想的に変化します。月明かりのもとで踊るのは水の精。やがて民謡風主題が回帰し、急流を経て、クライマックスを築きます。最後は川が視界から遠ざかってゆくかのようです。

モルダウ（ヴルタヴァ）川の蛇行による神秘的な地形。チェコの代表的な絶景スポット「マーイの展望」
stock.adobe.com

いいお・よういち（音楽ジャーナリスト）／著書に『クラシック音楽のトリセツ』（SB新書）、『R40のクラシック』（廣済堂新書）、『マンガで教養　やさしいクラシック』監修（朝日新聞出版）、『クラシックBOOK』（三笠書房）他。雑誌やウェブ、コンサート・プログラム等に幅広く執筆する。テレビ朝日「題名のない音楽会」他、放送でも活動。